

中東民主化運動とイスラーム復興運動における一考察

—1970年代以降を中心として—

奈須 健*

A Study on Democracy in the Middle East

and Islamic Reconstruction Movement

—Mainly since the 1970s—

Ken NASU

Until now, a wide range of people has been involved in Muslim debates over political liberalization and democratization. For example, secular Muslims who want a separation of religion and state, Islamic reformists reinterpreting Islamic traditions in favor of the elected government in modern elections, Muslims reject democracy, and so on. Modern Muslim politics often uses Islam to justify democracy, dictatorship, and republican or monarchy. Some past Islamic leaders have opposed Western democracy and the parliamentary system. Such negative reactions were often part of a general rejection of the effects of European colonialism. And it was more about protecting Islam from dependence on the West than on rejecting democracy altogether.

Some Muslims believe that the underlying sovereignty of God and the sacred law are incompatible with the concept of national sovereignty and civil law. Besides, some Muslims argue that Muslims should create their forms of political participation and democracy in Islamic doctrine and that there is no need to seek Western-style democracy.

Thus, Muslims in a wide variety of positions are incompatible with Islamic democracy. This paper examines how Middle Eastern countries have considered and acted on democracy since the 1970s.

Keyword: Middle East, Muslim, democracy, Islamic radical, Islamic reconstruction movement, laicism

1. はじめに

「中東の民主化」とひとえに言っても、現実には現代イスラーム思想自体が多様であり、百家争鳴状況と言っても過言ではない。トルコ共和国では「政教分離こそ真のイスラーム」との思想を打ち出し、一方サウジアラビア王国では「政教一致を真のイスラーム」と打ち出している。同じイスラームであっても全く逆の発想を持ち合わせている。ハーバード大学の政治学者サミュエル・ハンチントン博士の著作である『文明の衝突』は、全世界に大きな反響を巻

き起こした。ハンチントン博士の説によれば、冷戦時代に主流であったイデオロギー対決は終焉し、世界政治は異文化間での対立や国家間の緊張状態を生み出した。20世紀後半に頻発した民族紛争や宗教対立の状況を鑑みると、ハンチントン博士のこの見解は正論であったといえるだろう。実際、近年世界的に取り挙げられているイスラームに対して、イスラームといえば過激なイスラーム原理主義者を連想するものが少なくない。しかしながら、イスラームは本当に西欧文明とは相いれないものなのであろうか。西欧世界のみならず、世界の多くの国々で人々が声を挙げるようになってきた民主主義は、イスラームとは両立することができないものなのであろうか。

*近畿大学工業高等専門学校

総合システム工学科 共通教育系

このような「文明間の対立」や「イスラームと民主主義の両立」という問題に関して、ジョージタウン大学のエスポジット博士とボル博士は著書である『イスラームと民主主義 (Islam and Democracy)』の中で、イスラームの歴史と地域固有の特徴を多元的に洞察することにより、問題解決のための新たな視座を提供している。IT 革命によるグローバリゼーションが急激に進行する一方で、アイデンティティの確認に対する要求が世界中でますます高まっている。グローバル化が叫ばれる昨今、「文明の衝突」から「文明の調和」へ新たに考えていく必要がある。

2. 民主化運動とイスラーム復興の思想

1990年代には、ムスリム世界の多くの国々で、民主化運動とイスラーム復興が互いに影響を及ぼしながら大きな変革となってあらわれた。この「民主化運動」と「イスラーム復興」という二つの大きな社会運動の中で、宗教及び文化的同一性などの問題が、民衆の参政権の取得や、市民社会の確立という問題と複雑に絡み合ってきた。独立後の発展の歴史は、西洋の世俗的な考えに沿って進められてきたものだ。政権の体制側だけでなく反体制側の政治・社会運動においても、宗教という言葉の理解が何通りも存在してきた。その中には、宗教を正しく理解し忠実に実践することもあれば、時に宗教を乱用し意図的に解釈し強行することもあった。

ムスリムの現在に至る状況は、イスラームが他の民族との関係の中で、単独で存在してきたわけではない。近年のグローバル化の中で宗教や共同体が復興し、中東圏だけでなく、アジア圏においてさえも活発な民主化運動が行われている。脱世俗化の方向に向かうという考え方は、社会が発展すれば西洋化と世俗化が進むという考え方に相反するものになっている。国家の政治指導者と宗教指導者は、個々の同一性を再確認し、国家の発言権の拡大を求める宗教勢力や民族主義勢力に対して何らかの対策を考慮しなければならなかった。このように宗教的・民族的同一性は、世界秩序を新しく構築していくうえで影響を及ぼしているといえる。その新たな世界秩序の中では、グローバル化によって、その脅威はもはや超大国間や国家間のものではなく文明間のものへと変遷しているともいえる。

「民主主義」という用語には、元来明確な定義が存在してきていない。これまで異なる解釈も多々なされてきているため、これからも新しい解釈も生まれてくることも考えられる。極論すれば、民主主義という用語には多種多様な解釈と応用が可能であるといえる。ある同一の考えを抱く人々の信念や思いこみに反して、民主主義の西洋における経験は、単なる枠組み内だけで単純に捉えられるものではない。実際、西洋における民主主義の歴史は、常に混乱し

た過程であった。民主主義は、民主主義論者と民衆の指導者の双方から擁護され、うわべだけで飾られた議論と流血の革命の対象となった。民族主義にはそもそも様々な解釈が存在し、民主主義の発展には多様な形態があるということ認識すれば、従来の民主主義という言葉に代わりうる用語や解釈が存在することに気付く。この意味で、西洋の民主主義をそのまま採り入れることだけでなく、西洋の民主主義制度を応用したり、民衆の政治への参加と発言権の拡大をその地域ごとに根差した形で成し遂げることもまた民主化といえよう。同様に、西洋の民主主義を採り入れることの正当性は、単に新しいものを作り出すだけでなく、従来からの概念、信念、制度を熟考したり、新しく定式化することであると認識すれば、西洋以外の文化的や宗教的な伝統の中でも統治の民主的な形が生み出されてくる可能性が生じてくる。

民主化、政治参加、イスラーム的民主主義の要求は、個々に理解や解釈が異なっていることがあっても、多くのムスリム社会で民主主義が大きな議論となっている。多くのムスリムは、政権だけでなく政党や反対勢力の信頼性や正当性を決定するための判断基準として、民主主義を支持するかどうか考えなければならない。ムスリム指導者や政治家は、自らの信仰の深さや思想的傾向にかかわらず、これまで常にイスラームの政治への関わり方に尽力してこなければならなかった。

3. 1970年代～1990年代の変遷

1970年代と1980年代は、日本赤軍が起こしたハイジャック事件からイラン革命に至るまで、中東地域は激動の時代であったといえる。言い換えれば、革命的なイスラームに対する恐怖に支配されていた時代だともいえる。しかし1990年代に入ると、政治や宗教がより多層的な状況が生まれてきた。これまでのイスラーム原理主義者やイスラームのテロリストに対するイメージは、都市部で数々のテロ活動を行い、西洋諸国に対する聖戦を実行することを掲げて活動を行ってきた。しかし、一方でそうしたイメージに、イスラーム活動家が加わり、市民社会の中で活動し、自らの社会・政治的団体や政党を結成し、他の政党や組織と連携してくるようになった。

1980年代後半には、多くの国が経済的にも政治的にも行き詰まり、1989年にベルリンの壁が崩壊されると、その後も社会主義は勢いを失い、アメリカと二大超大国であったソ連をも崩壊する形となった。このような状況は、民主主義を勢いづかせる一方で、国家の政治的な環境がより広く受け入れられる状況を生み出したともいえる。すなわち、1980年代末から1990年代前半にかけて、原理主義が政府を脅かすようになっただけでなく、イスラーム政党や

組織が現政権に代わりうる社会・政治的選択肢であることを世に知らしめることになったといえる。

1980年代は、イスラーム原理主義によって頻繁に起こるテロへの恐怖が支配していた。一方で、1990年代に入ると、イスラーム行動主義の主流派が選挙で勝利を収めるようになってきた。イスラーム世界の多くの政府や西側諸国は、これまで「イスラーム原理主義」は民衆からほとんど支持を得ていない過激な革命的脅威であると非難してきた。しかし、チュニジア、エジプト、ヨルダン、トルコなどの国々で、イスラーム主義者が選挙により最大の反政府勢力となった。このため、イスラーム主義者が民主主義を乗っ取るようしていると非難する潮流が出てきた。このような非難は、チュニジア、エジプト、アルジェリアなどの各国政府が、民主化への取り組みを遅らせ、その勢力を縮小させるだけでなく、イスラーム主義者からの批判や反対を抑圧するために都合の良い口実となった。イスラーム主義者の中には民主主義を乗っ取るようしていると警鐘を鳴らす者も出てきた。一方で、多くの政権が自分たちを脅かすことのない民主主義、すなわち政府批判を許さぬ民主主義しか容認していないと非難する者も出てきた。

4. 考察

中東諸国及びムスリム社会が抱える政治・経済の現状を鑑みると、民主化が開かれたものであるとは決して言い切ることにはできない。西洋で発展してきた民主主義が、異なる文化を持つ国において、どの程度適用可能であるかが問題として挙げられる。イスラームや民主主義などの解釈を、固定観念に縛られた形でのみ用いるならば、こうした問いかけに対して正しく答える事はより一層難しくなる。ムスリム社会に民主主義などの解釈が浸透した時、民族主義や社会主義が西洋化した世俗主義から離れ、国や地域に根付き、イスラームと結びついた独自のものと解釈することが重要になってくる。同様に民主化の過程も、大衆に根差した真に民主的な運動となり、イスラームの政治的復興が堅固なものになるにつれ、その世俗的特徴は失われていくことにもなる。

世界の政治環境は、ポスト冷戦や湾岸戦争後の経済状況等、現在に至るまでにより一層複雑なものとなってきている。ムスリム世界の発展途上国は、世界の他の発展途上国と同じように、アメリカとソ連の二大超大国の対立がもたらした有効な援助や支援をほぼ期待することはできない。アメリカは多くの援助を提供する必要はほぼやなく、またそうする意思も持ち合わせていない。同様に国内の経済問題を抱えた湾岸諸国も、かつてのようにはムスリム国家に対する援助も外国人労働者に対する雇用も提供する

ことはできない状況になっている。脆弱な経済力しか持たず、急激な人口増加の問題に直面している国々が、将来に向けて山積するこれらの問題に取り組んでいくことは、極めて困難なことである。

当然のことながら、原理主義とテロリズムの脅威に対抗することも必須である。しかし、暴力的手段によって明らかに現体制の転覆を目指している原理主義者と、体制に参加しようとする意欲を表明している行動主義者とを区別することができなければ、政府は全てのイスラーム組織を無差別に弾圧することになってしまう。こうしたアプローチは、政府とイスラーム運動との間で全国的規模の暴力と報復といった悪循環を招くことになる。このような状況は、明らかに社会の過激化、テロリズム、多極化をもたらすことになる。イスラーム運動をむやみに弾圧し、その活動を阻もうとすれば、全国的に暴力的運動が勃発するだけでなく、穏健派までもが過激化することになる。暴力的な過激派と穏健派を区別することは、双方に妥協点を図り、協力関係を構築させてしまうよりもはるかに生産的なことである。

21世紀においては、権力の維持に固執することなく国家の政治・社会的発展に真に関心を持つ政府ならば、民主化を支援するべきであろう。そして、市民社会を成長させる制度や価値の発展を促すことによって、政治の自由化や人権問題に熱心に取り組んでいるということを示すことが求められるだろう。各国政府は社会の安定と自由を直接脅かす組織と体制内で段階的に変革を行っていかうとする団体とを、それらが世俗的であれイスラーム的であれ、しっかりと区別した上で、政策を実行しなければならぬ。現実的かつ効果的に機能している民主主義においても、現在、権力構造を再構築し、政府を一新しようとする努力が必要とされるのではないだろうか。

参考文献

- 1) アッ＝サドルM・B、ファドルッラーM・H著、小杉泰編訳『イスラーム革命と国家—現代アラブ・シーア派の政治思想（中東学叢書6）』国際大学中東研究所、1992年。
- 2) 井筒俊彦「シーア派イスラーム—シーア派的殉職者意識の由来とその演劇性」『世界』460、1984年。
- 3) イブラヒム、サード・エディン「宗教と民主主義—イスラームの場合、市民社会、および民主主義」猪口孝/エドワード・ニューマン/ジョン・キーン編『現代民主主義の変容—政治学のフロンティア』有斐閣、1999年。

- 4) エスポズイト J・L 著、塩尻和子、杉山香織監訳『グローバル・テロリズムとイスラーム—穢れた聖戦』明石書店、2004 年。
- 5) エスポズイト J・L、ボル J・O 共著、宮原辰夫、大和隆介訳『イスラームと民主主義』成文堂、2000 年。
- 6) 私市正年、栗田禎子編『イスラーム地域の民衆運動と民主化（イスラーム地域研究叢書 3）』東京大学出版会、2004 年。
- 7) ケペル・ジル著、早良哲夫訳『ジハードとフィトナ—イスラーム精神の戦い』NTT 出版、2005 年。
- 8) ケペル・ジル著、丸岡高弘訳『ジハード—イスラーム主義の発展と衰退』産業図書、2006 年。
- 9) 小杉泰『イスラーム帝国のジハード』講談社、2006 年。
- 10) 小杉泰『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会、2006 年。
- 11) 小杉泰『現代中東とイスラーム政治』昭和堂、1994 年。
- 12) 小松久男、小杉泰編『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会、2003 年。
- 13) 酒井啓子「イラクにおけるイスラーム政党—制度化と運動実践の連関と乖離」『アジア・アフリカ研究 1』2001 年。
- 14) シャリーアティー・A 著、櫻井秀子訳・解説『イスラーム再構築の思想—新たな社会へのまなざし』大村書店、1997 年。
- 15) 末近浩太「現代レバノンの宗派制度体制とイスラーム政党—ヒズブッラーの党争と国会選挙」日本比較政治学会編『現代の宗教と政党—比較のなかのイスラーム』早稲田大学出版部、2002 年。
- 16) 寺島実郎他編『「イラク戦争」—検証と展望』岩波書店、2003 年。
- 17) 中田考『「イスラーム世界」とジハード—ジハードの理念とその類型』湯川武編『イスラーム国家の理念と現実』栄光教育文化研究所、1995 年。
- 18) 中田考「ジハード（聖戦）論再考」『オリエント』35：1、1992 年。
- 19) 日本国際問題研究所編『湾岸アラブと民主主義—イラク戦争後の眺望』日本評論社、2005 年。
- 20) 日本国際問題研究所編『現代の宗教と政党—比較のなかのイスラーム』早稲田大学出版部、2002 年。
- 21) ハンチントン S・P 著、坪郷実、中道寿一、藪野祐三訳『第三の波—20 世紀後半の民主化』三嶺書房、1995 年。